

中国日本商会

みつま

三渚先生の

「ナルホド中国、ナットク中国」



## 三渚コラム 中国「津津有味」-5

現実には、中国人が自分たちを独自のアイデンティティを有した文化として意識し、それを守ろうとする意識は、モンゴルによる元の統治時代を待たなければならず、南北朝時代の五胡の侵入、その延長にある異民族統治の唐王朝の時代もそれに対する愛国心と言う概念は未成熟だった。元の時代でさえ、北部の漢人、南部の南人の間に当初、中国人としての連帯感がどれほどあったかは疑わしい。

ただ、元の時代は元曲と呼ばれる戯曲の全盛時代で、西のシェークスピアにも比すべき、関漢卿のような偉大なドラマ作家も現れた（しかし、ワープロでシェークスピアはすぐカタカナ表記で出るが、関漢卿は「官関係」になってしまう）。その作品には権力を笠にきるモンゴル人がよく登場する。こういったプロセスを通して、共通の愛国心が芽生えていったとも言えよう。中国人が中華文明というアイデンティティを意識する証左は炎帝・黄帝の子孫を表す言葉“炎黄”だ。“炎黄子孫”即ち中華民族で、齒に衣着せない論陣を張った『炎黄春秋』という雑誌もある。昨年、長年匿名の寄付を続けていた人の氏素性が明らかになった記事があったが、彼の名乗った仮の名は“炎黄”だった。

世界のどこにいても“炎黄子孫”としての誇りを持ち、儒教や道教の教えを崇め、中国のさまざまな節句を祝う、そうであれば、其処が楽土なのだ。このような人たちの愛国とは、まさしく「愛中華文明」に他ならない。

ところが、中国で最も有名な愛国者と言えば岳飛になる。岳飛は南宋にとっての愛国者だ。その戦った相手は金である。中国は昔から多民族国家だった、と言うが、南宋の相手は同じ国内の少数民族だ。日本で北条時宗や東郷平八郎を愛国者というのはまだわかるが、坂上田村麻呂や源義家を愛国者とは言わない。今の中国政府は盛んに明代の栄光を口にすが、それは、明が漢族の王朝だったからであり、滅満興漢は1911年の辛亥革命に至るまで数百年続いたレジスタンスのスローガンだった。こうした意識の下での愛国は実は「愛漢民族」であり、その意識の下では、時に少数民族に対する苛烈な行動も生じかねない。

もう一つの愛国は「愛中華人民共和国」である。中国では「天命によって」王朝が交代するたびに、前の王朝の姓が激減する。易姓革命のもう一つの側面である。士大夫階級、即ち実務官僚層は温存されるが、権力者とその一派は徹底的に撲滅される。多くは海外へ逃げ出し、レジスタンス活動も行う。現在もその傾向は存在する。ただ、現代はそれと異なり、海外で能力を発揮する、つまり海外雄飛組も少なくない。ただし、それはイコール頭脳の流出でもある。いずれにせよ、「愛中華人民共和国」が三つめの愛国の実態である。

為政者にとって「愛漢民族」は人口の90%以上という圧倒的な政治基盤になり得る。また、「愛中華文明」は海外華僑、華人、華裔も含めたあらゆる中華系の人たちを結集させる大義名分になる。そして、儒教が最も尊ぶ孝は百行の本であり、忠を孝の一側面と捉え

中国日本商会  
みつま

# 三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



ることで統治を正当化する。

中国人は、様々な場、時にはビジネスの場でもこの三つの愛国を時に応じて意識的無意識的に、また、融通無碍に使い分ける、それが中国人のビジネススタイルだ。